

【課題の狙いと総括】

今回はなんと新入部員の方が三名もいらっしやいます。部員一同、歓迎いたします！ようこそ。

これで今回の課題の狙いは無事達成です。実は、今回の狙いは「新入部員を増やすこと」にありました。クリスマス、短編に取り入れやすいテーマだったかと思えます。「ともかく何かを書いてみよう」「自分にも参加できるかもしれない」、そう思っただけで欲しかったのです。

誰しもひとつやふたつはクリスマスにまつわる思い出があるでしょう。また、オリジナルの物語を作り出すのにも大変便利なテーマです。今回はとにかく自分の中にある「書きたい」「書いてみたい」を発散してもらうためにクリスマスをお題としましたが、どうでしたか？ すんなりと書きたいことが浮かびましたか？

クリスマスを短編の本筋とするか、あくまでちよつとしたエピソードとして借りてくるか。クリスマスをらしい色彩をまとったものがどれくらい出てくるか、ワクワクしながら待つておりました。結果、大変素晴らしい作品が集まり感激しています。「とにかく書いてご覧よ」というメッセージを受けて、自由課題も幾つかご提出いただき、私は嬉しい。皆様ありがとうございます。

塩屋文芸部は、もともと文章を書くことが好きな人、得意な人ばかりではありません。まず私がそうです。得意ではありません。

思っただけが胸の内にあつて、しかし発信する術を持たない人もいます。書いたことがないから書いてみたい人もいます。

そんな全ての人の受け皿として、塩屋文芸部は存在しています。

他の方の作品を読み、講評し合うことで、筆力は伸びて行きます。だから人数はある程度多い方がいい。さらに、新しい風が吹くことで、古参の部員達も刺激を受けるでしょう。そのための今回の課題でした。

これからも仕事やプライベートに支障のない範囲で楽しくご参加ください。そして、もし出来ることなら無理難題と思える課題が出た際も、是非取り組んで頂きたいと思っております。「難しく出来ないかもしれない」を超えた時が伸びる時です。

【猫村家のクリスマス】

やだ楽しい〜！これ好き〜！しかも知性まるだし〜！

終始コメディタッチなのに、超絶技巧でした。とても楽しく読ませてもらいました。それにしても真剣に犬神家の内容を考えていく、実際にやったらものすごく面白そう。残念ながらもう見てしまったので出来ませんが。

主人公がツヅ君にベタ惚れで、好みすら合わせてくる女の子です。真里ちゃんは二十四歳、ツヅ君は三十二。脚本脳と演技脳をフルスロットルにして、真里ちゃんはツヅ君と対等に戦っています。真里ちゃんは早く役者に戻りましょう。

ツヅくんの説明、「まず顔が良い」から始まり、個性的な視点で「好き」が溢れる描き方で、本当にうまい。そして読者もツヅくんが好きになってしまいです。

役柄が移り変わっていくシーンには、一瞬不穏ささえ感じるほどの巧みさを見ました。今、森博嗣の「赤目姫の潮解」を読んでいるところだったので、ちょうどその作品の「視点の移り変わり」のようだな、と。彼氏が出来て浮かれている冒頭では、真里ちゃんはちよつとアホな子なのかと思っていました。とても賢い子でした。このギャップが素敵です。

この作者は既にシリアスからコメディまで、短編も長編も自在に生み出せる力を持っています。さらりと書いたようにみせて、細部まで読者への配慮を怠らず、様々な表現をバランスよく配置し、誤用もなく、日本語は美しく、正確に校正もなされています。はつきり言ってみちやくちやレベルが高いなあ。

- ・ 妹が百一人、ここで爆笑です。
 - ・ メタ構造で回避、いうくだりが好きです。コウスケllAllキンダイチ。
 - ・ 脳内の続編、で結婚の予定が出てくるところも好きです。
- 好きな箇所がいっぱいあります。

この短編って、真剣に講評して良かったんよね？

【繰り返す日々】

入部おめでとうございます！ まず、文章を書くことに抵抗がない！ すごい！ この作者は「文章をちゃんと書いたことはない」と言うてはりましたが、このまま練習すれば、ぐんぐん伸びると見ました！ クリスマスをさりげなく絡ませて、幸せな猫ちゃんの生活を描いています。最初は恋人同士と思わせて、後で猫ちゃんであることを明かします。「ご飯が自分で用意できない」あたりで大体の方は気付くのかな。と言っても本当にはつきり猫と分かるのはチュールのくんだり。でもね、そこまでは恋人同士としても普通に読めちゃいます。猫のフリをした女の子という設定でも行けちゃいそうだなあ……と思いつながら楽しく読みました。

夏目漱石の吾輩は猫である、を彷彿とさせる、少し硬めな言葉遣いの猫ちゃんですが、時々「あたたまりたかった」「撫で撫で」「忘れちゃうんですよ」が差し込まれて、猫らしい感じが漏れ出てかわゆいです。

時々言葉の誤用と、少し整理した方がいいかな、という箇所がありました。念のため少し書いておきます。

・段落の初め、つまり改行した後は一字下げです（スマートフォン……、どうやら……、すると「はいはい〜」など）。ただし、鉤括弧ではじまるときは一字下げをしなくても大丈夫です（「今日はクリスマスやしな……」）。

・「このお家に来てからというものの」は「このお家に来てからというもの」でしょう。「ものの」を使うときは「こうやねんけど、でも〜」というニュアンスが含まれます。例えば、「彼にはああ言ったものの、本当は行きたくないのよ」など。

・猫ちゃんの知っている言葉と、知らないであろう言葉を少し整理すると、より「猫視点」という設定に違和感がなくなるでしょう。

他にも幾つかありましたが、櫻井みずきちちゃんが書いてくれるでしょう。

言葉遣いからして賢そうな猫ちゃんだけど、チュールに夢中になったり、いつもの黒猫を探したり、毎日同じでも飽きないと言いつつ切るところが、いかにも可愛らしくて平和で猫らしくて、読んでいて幸せになります。

・「おぼけのようにひよろりと手を出して」、いい表現です。

・彼の「なんやねん〜」が好きです。困ったような笑顔が目に見えます。

・繰り返す日々、という言葉は「単調で、退屈」という印象も持つ言葉なので、この短編は楽しい感じかな、ネガティブな感じかな〜どっちかな〜と思いつながら読み始めました。

それを「最高の今日を何度でも」という言葉で綺麗に締めくくり、タイトル「繰り返す日々」をポジティブにして終了！ 大変良い短編でした！ 今後もいろいろ読ませてください。

【山のおそなえ】

おっと、とんでもない人が入ってきたぞ。これ早く出版お願いします。もしかしてもう本になっていませんか？ともかく、塩屋文芸部へようこそ。歓迎します。部長だけが知っていたのですが、この方は絵本作家さんです。大阪のグリグリさんで絵本を一冊ちらっとだけ拝見しましたが（全部読まずに、楽しみに取っています）、あまりにツボで即購入を決意しました。でも在庫が無かったのですよ。早く増刷してください。

この短編に関して、ほとんど指摘するところはありません。誤字脱字は見当たりません。ひとつ、「うした」がずっと続いていたり、似た表現が近くで重なったりしている箇所があるのですが、語尾や表現は変えた方がいいのか？と思いましたが、この短編の雰囲気や流れに合致しているので、このままで良いのかもしれませんが、それから、リュックを広げて勉強を始めるシーンは一瞬、山を降りてからかと思ってしまうましたが、ここも先に進めばすぐにまだ山に居ると分かるので、良いのかもしれませんが……。

三人称小説で淡々と書いているようで、地の文に、隼人の独白や心情を絶妙なバランスで入れ込んであります。これは私にはできない。

「怖い」と「悲しい」と「切ない」が入り混じり、短編の雰囲気作りが素晴らしい。そしてこのお話は日本ならではの、山の神様のような、と呼んではいいのでしょうか。恐ろしい存在を直接その様子を描写することなく描いていますが、「怖い」では終わらない。これは怪談ではなく、隼人と祖母の心の交流を描いたドラマだと感じました。

短編の始まり方、閉じ方、時系列、周りの大人たちの登場の挟み方、どれを取っても素晴らしい、本当に勉強になります。

例えば、動作の表現、「半袖の腕を抱えて」「息も止めていたのか、瞬きすると深く息を吐いた」「両頬を手で包むようにして引き寄せ」「小さく身を強張らせた」「ちらと校庭を」「など、その場にいちばんしっくりくる表現を、いともたやすく（と言っているのか分かりませんが）選び出しています。ちらっと、じゃないのですよね、ちらと、なんです。ここは個人的に、うおお！となりました。こういうところ、好みなんです。

場面説明もそうですし、表情や動き、心情を表す言葉が本当に豊富で、この作者の中には、引き出しがいっぱいあるのでしょう。

「おばあのお話をしよう。ここで一緒に暮らした話を」なんと美しく、温かい終わり方。そして、この技術、空気感は、いったいどのように培われてきたのでしょうか。そのあたりも興味があります。よかったら、今後もどうぞたくさんのお手本を見せてください。

読めてよかった。素晴らしいお話をありがとうございます。

【アイザック・ブラウンの結露と傾斜】

出ました、とても好きな作品です！ 賢い人しか出てこない、この清々しいまでに知と美に振り切った世界観。本人が賢くないと書けません。主人公が最後の最後に「短編が一本書けそうですけど」と言った瞬間に、「ああ！ やられた！」と思いました。この短編自体が主人公の書いたものだったのですね。全貌が最後に明かされたときの高揚感つたらないです。こういうのが読みたかった、と毎度思われます。

構成も表現も、好きなどころを挙げると本当にキリがないのですが、特に新鮮な比喻表現に目を奪われます。「膝より下までの形が、ぼんやりと陰になり落ちる。色は弾かれた」、「凍った湖に星をいくらかこぼしたような」、「優しいジェットコースターみたいだ」。こんな表現、普通できません。自分には思いつかないのに、これを読んだ瞬間に、この表現しかあり得ないと思えるのです。

一人称、そして独白が多め。これも、展示を見て感じる瞬間瞬間の印象や、驚きを表すのに最適な描写方法です。そして改行のタイミング、かなり計算されています。美術館の中を私も一緒に進んでいく、その時間経過の表現、そして読みやすさともに、意図された改行。

指摘・気づきは以下のとおりです。

- ・ ステートメントの訳者…現代美術館が現代美術観になっています。
- ・ 作品リストの書き方や挨拶、注意事項が完全に本物のそれです。すごい。縦書きでザツツと見られたらもつと良かったかな。でも単純にPC技術の問題なので、別に良いと思います。

この作者、櫻井みずきちちゃんのご主人、櫻井類君は画家です。私も類君の個展を何度も訪れています。アイザック・ブラウンの結露と傾斜、この展示を実際に見に行けたらいいのに、と思った方は、是非今後、櫻井類君の個展に足をお運びいただければと。

作者自身も美術の教養が高く、審美眼に優れ、おそらく絵や展示の見え方が常人（例えば私）とはまるで違うのでしょう。必ずしも絵や展示の感想を言葉にする必要はない、とも思いますが、もし言葉にできたなら、自分のうちに生まれた感覚や感想をこんなふうに言葉に出来たなら、より人生は楽しくなるでしょうね。言葉は本当に尊いものです。

ああ、本当に面白く、読み応えのある短編でした。

こんな人が現実にはいたら良いのに、こんな出来事が本当に起これば良いのに。私もこの策略にはまりたい。騙されたい。

この輪の中に、私も居たかった。

「さあ、私。口角をあげろ。」最高のシーン。CMかよ。

【ユールの調香師】

自作です。

短編に出てくるクリスマスに関する風習やミサの様子は、北欧の風習に似せましたが、全て架空の設定です。ユールという街は存在せず、調香師を兼ねた聖職も存在しません。もしキリスト教など信仰をお持ちの方がいらしたら、ご勘弁ください。信仰心を持たない自分でも、信仰する人々の世界の美しさを表現したかったのです……。

クリスマスという課題に真っ向から取り組むべく、まずクリスマス文化を図書館で調べ、時間が無かったので設定を自分の土俵（調香）に持っていきました。書くスピードは上がりましたが、プロット、起承転結をつけるのが苦手で、結末を決めずに書き出してしまっているので大変です。最初は三人称小説でしたが、状況説明ばかりで読みにくい。そこで一人称に変え、半分以上削ぎ落とし、あちこち並べ替えました。何とか最後の最後に思いつきで「クリスマス」と「香り」を融合し、それに合わせてまた全て修正。おかげで時間設定を間違えた箇所があります（挨拶は「おはよう」ではなく「こんばんは」にするべきでした）。書き出してから一週間、疲れました。それでもやはり好きなものを書くのは楽しい。すると言葉が生まれてきました。

ユールとは本来、北欧で行われるお祭の古い名前です。平たく言えばクリスマスのことです。登場人物は、文芸部員の皆様からお名前を戴き、フィンランドとスウェーデンの名前から似たものを探しました。新入部員の方々の歓迎の意味も込めています。もじりすぎて誰が誰か分かりにくいのですけれど。職業や、頭の一字から推察ください。ノーアは部員の飼っている猫、ノアちゃんです。アーダだけはフィンランドのクリスマス映画に出てきた名前です。

ミーリヤは足の速い文芸部の元・部長、櫻井みずきちゃんです。部長を引き継いだところなので、「ミーリヤから何かを引き継ぐ」という設定にするつもりが、気がつけば彼女は清らかな聖霊になってしまいました。これからもお導きをお願いします。

乳香（にゆうこう）と没薬（もつやく）は良い香りのする樹脂です。乳香、没薬、黄金。この三つはイエスキリストの誕生時に、偉い博士達がベツレヘムの星が輝くのを見て駆けつけたときに持ち寄った贈り物です。キリスト教徒でなくともアロマをたしなむ人ならよく知っている伝説です。瞑想にちょうど良い、やや爽やかさと深い香りをもつ乳香、よりピリッとして力強い香りの没薬。

【いつの日かドリップで淹れた珈琲を…】

これはエッセイでしょうか、それともフィクションでしょうか。作者自身の体験を自分の中からじっくりと掘り起こして、淡々と書きつけることによって、昇華させている。珈琲をいれるように、じっくりと。そんな印象を受けました。

この短編の中で主人公が置かれていた状況はハードなもので、取り乱したり不安を持ったり、眠れなかったり。しかし、それらの思い出を、時が経った今は既に落ち着いた心で書き綴ることができているという、そんな印象です。

父親が亡くなる瞬間も静かな描写。

母親に珈琲を飲ませるシーン、二回目には肯定してくれるというのをちゃんと分かっている。胸をうちました。

最後の父親への語りかけには、温かな、人間らしさが出ています。最後の投げたような「遠いねー」には、親しい家族にしか出さない、雑な感じが出ています。「遠いなあ」か「遠いかな」などの方がより優しさが表現できそうな気もしますが、どっちでも。

・ 鉤括弧の最後は読点が不要です。「なんとも言えない状態です。」は「なんとも言えない状態です」が正しい。

・ 「認知症になって」、は「認知症になって」、でしょうか。

・ 「親戚を一切合切黙らせてくれた」ですが、一切合切を物や事象ではなく、人にも使えるのか、これはちよつと自信ありません。

・ 父親が事務的に淡々と事務を教えてくれたくだりですが、「それでも一ヶ月という時間はあまりに短く感じられた」の後に、もう少し短編内の時間を戻すための表現があっても良かったかもしれません。

そういえば、思わず珈琲の淹れ方をメモしてしまいました……。かなり丁寧に細部まで書かれていて、読んでいるこちらも、珈琲を淹れているかのように、落ち着くことができます。文章から香ばしい香りがふわりと立ち、リラックス。ちよつとしたマインドフルネスみたいでした。文章能力が高いこの作者さん、色んなエッセイが読みたいなあ。

【アキとカナ、サンタになる】

自作です。二つ目です。「ユールの調香師」の收拾がつかず、気分転換に書きました。所要時間は梅田から塩屋までの一時間半。

是枝監督の映画「奇跡」で、まえだまえだの兄弟が大阪弁で演じていたのが好きで、どこか頭の中にあっただような。アキカナにはもっとたくさん活躍してほしい……。もう少し膨らませた短編もチャレンジしたいところ。

裏設定はあまりありません。お父ちゃんが兵庫駅近くの三菱電機にお勤めで、発電機のモーター設計が専門で、原子力発電所の開発で全世界飛び回っている若手エリートで、南米に長期出張に行っていて、背は低く、ビールが好き、という設定しかありません。

【閉園後のメリーゴーラウンド】

塩屋文芸部に入部いただき有り難うございます！ 最初からこんな素敵な短編を提出いただき、部長は嬉し涙です。クリスマスですし、恋愛小説を誰か書いてくれないかな、と思っていたのです。

とにかく雰囲気抜群です。彼氏ではなく「恋人」という書き方も良いですね。ものすごくインパクトのある出来事が起こったわけではないけれど、二人の間にしか分からない心の機微が描写されていて、とても優しい気持ちになります。街のあかりも、多摩川も、メリーゴーラウンドも、雪も、信号も、まるで二人のために用意された映画のセットのよう。終始映画かミュージックビデオのようで、自分好みにカット割りされて、目の前に浮かんできました。

四八〇キロメートルの残業という表現が素晴らしい。大阪から東京の世田谷区あたりまでの距離に相当しますが、何か設定はあるのでしょうか。完全なる実話だったりするのでしょうか。

閉園後のメリーゴーラウンドという発想も美しく、儂い。自分の好きな世界観というものを持っているからこそ、この雰囲気を作り出せるのでしょう。「発端は」という出だしも、「ぶんっ。突然視界が……」という表現も、読者を引き込みます。ただ雰囲気が良いだけでなく、情景描写が出来ており、適切な表現を選び取っています。誤字脱字もなく、正しく書かれています。

二人で家に戻り、潜んだ後は、ちゃんと必要なものを持ってオールナイトイベントに出かけた、ということでしょうか。「覚悟を決めて……抜け出した」「帰るべき方向」「聖者」というインパクトのあるワードに引っ張られて、何か違うことが起こる可能性もあるのかな、と思えてしまったので、その辺りはまた教えていただきたいと思います。雰囲気を残したままで、もう少し場面の説明があっても良いかもしれません。

私なんて実際にぶんぶんメリーゴーラウンドされたらもう、どうしようもなく照れて「おろせー」って言ってしまえそう。

【月】

とても好みです。

文芸部全員が言及するであろう、「月」をひっくり返したタイトルから心を掴まれました。上下逆さまの月。ワードのテキストボックスを使ったのでしょうか。発想とセンス。「曖昧な輪郭がさらに抽象的になる」「見慣れたものとは違う表情の月」「まるで糸電話みたい」「ゴッホの星月夜」など、ムードがあり、詩的な表現が短編の雰囲気を作っています。

短編は静かに進みます。余計な説明はせず、白い腕、眼鏡などの描写で何となく容姿を想像させています。

鉤括弧をつけずに差し込まれる会話も自然かつスタイリッシュです。例えば、「僕は夜の電話が好きなんだ、と伝えた」から始まるあたりが、とても好きです。そして、二人の会話はとても丁寧で品があります。

二時間の時差で南半球なら、男性が住んでいるのはシドニーかメルボルンあたりでしょうか。彼はお仕事で来ているのだろうか、彼女はどんな話をしようとしているのだろうか……。短いお話の中に、書き切らないことによる美しさがあります。彼女は南半球が暖かいことすらもしかしたら気がついていない？ それから、彼女は同じ月を見ていると思っっている。写真を撮らなかったこと。想像の余地があり、読み終わってからも（少し切なさに似た）余韻が残ります。

鉤括弧は一字下げしなくても良いのです。例はこちら。

私は慌てて言った。

「違いますー！」

←

私は慌てて言った。

「正解ですー！」